

---

# ハヤテのごとく！アナザーストーリー『レクリエーション』

ヒロインを幸せに

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく！アナザーストーリー『レクリエーション』

### 【Nコード】

N4444D

### 【作者名】

ヒロインを幸せに

### 【あらすじ】

白皇学院の行事で、遊園地にやってきたハヤテ達。ハヤテ、ナギ、ヒナギク、伊澄など、ハヤテのごとく！でおなじみのキャラが登場する、『ハヤテのごとく！』のもうひとつの物語。

## 第一話：始まりの朝（前書き）

ハヤテのごとく！の小説をかくなんて夢のようです。 気楽に読んでください。

## 第一話：始まりの朝

白皇学院では進学する際、クラス替えが行われる。

その後、クラスのレクリエーションをかねて、遠足という行事がある。

だが、遠足といっても、行き先はクラスそれぞれ自由である。国外でもかまわない。

この小説はハヤテのごとく！でおなじみのキャラクター登場する『ハヤテのごとく！』のもうひとつの物語である。

「うーん。今日もいい天気だなあ。」

彼の名は綾崎ハヤテ。主人公だ。遠足の日である。

ハヤテ達のクラスでは、日本で有名な遊園地、富士 ハイランドに行くことになっている。

エリート学校としては、以外な展開だ。それには理由があった。理事長の気まぐれで行き先が制限されたのだ。（かなりいい加減に）なので、遠足を楽しみにしている生徒はそう多くはなかった。

だが、ハヤテは楽しみのようだ。富士 ハイランドなど生まれて初めてなので、ワクワクしていた。

「楽しみだなあ。」

「ふふっ、ハヤテ君たら、まるで小学生みたいですね。」

彼女の名はマリア。三千院家のメイドだ。ピチピチの17歳である。

「マリアさん。いやあ、まさか富士 にいけるとは思わなかったものですか。」

「確かに、国内というのは珍しいですねえ。パリやシドニーへ行くのは聞いたことがありますけど。」

もはや遠足とか関係ないなあと思うハヤテであった。

「あ、そろそろお嬢様を起こさないと。」

お嬢様の部屋にむかうハヤテ。

コンコン

「お嬢様。朝ですよ。起きて下さい。」

ガチャ

「もう起きておる。」

部屋からでてきた彼女の名は三千院ナギ。三千院家の一人娘だ。ハヤテのことが好き。ハヤテ

「お、お嬢様。一人で起きたんですか？」

「バカモノ。私だって一年に一度は自分で起きる。」

どうリアクションをとればいいかわからないハヤテ。

「今日は遠足ですね、お嬢様。」

「ん？ああそうだな。」ハヤテ

「楽しみですね。」

「あ、ああ、そうだな。」

頬をあかくするナギ。

ナギ『ハヤテと一緒に遊園地なんて、デートみたいだ。』

本来なら、ナギは遊園地に興味を示さないが、ハヤテが一緒なので、遠足を楽しみにしていたようだ。

## 第二話：始まりの朝2

ハヤテとナギは白皇学院へ向かっていた。いつもの道を二人並んで歩いていた。

「新学期になつて、もうすぐ一ヶ月ですね。」

「ふむ、そうだな。」

「クラス替えがありましたけど、馴染みのある人達が一緒でしたね。伊澄さん、ワタル君、瀬川さん、花菱さん、朝風さん。すごい偶然ですね。」

それがこの小説のお約束。つつこんだら負けです。

「それにまさかヒナギクさんとも一緒のクラスになるなんて思いませんでしたよ。」

この一言がナギの逆鱗に触れた。

「おい、ハヤテ。ヒナギクと一緒にのクラスになれてそんなにうれし  
いか!？」

「はい。」

ニパーと笑顔で言った。

火に油だ。

「ハ―ヤ―テ!!なにがヒナギクだ!私と一緒にのクラスではうれし  
くないというのか!」

ATフィール が発生していた。いや無 の境地のオーラか。とて  
つもない殺気に満ち溢れるナギ。

「お、お嬢様!？」

大ピンチな主人公。その時ナギの後ろから、

「あなたたち、朝っぱらから何やってるの?」

救いの女神登場。彼女は桂ヒナギク。頭脳明晰、スポーツ万能。だ  
けど高所恐怖症。ハヤテに対して好意を抱いている。

「あ、おはようございます、ヒナギクさん!」

「おはよう。ハヤテ君。ナギ。」

ヒナギクをじーつと見るナギ。

「ふんっだ！」

ヒナギクに挨拶をかえさずに先に行くナギ。

「！？ 何かあったの？」

疑問に思ったヒナギク。

「さあ？ 僕にもさっぱりです。」

主人公は天然なので、ご了承ください。

そんなこんなで学院に到着。クラスのほとんどが集合していた。

「ぎりぎりでしたね。」

「…ああ、そうだな。」

ご機嫌ななめなナギ。

「もう。さつきから不満そうね。」

呆れるヒナギク。

「だれかさんのせいだな。」

小声で言うナギ。

そんなことも気にせず、ハヤテはふっと気付いた。

「そういえば、ヒナギクさんが時間ぎりぎりに来るなんて珍しいですね。」

ギクツギクツ

「わ、私だって、寝坊ぐらいするわよ！」

ハヤテは感づいた。ヒナギクさんは子供っぽいところがあるから、遠足（遊園地）が楽しみで、眠れなかったのだろうと、ハヤテは思った。そんなヒナギクをカワイイク思い、思わずクスツと笑うハヤテ。

「あ！ハヤテ君！今笑ったでしょ！」

「い、いいえ、全然…。」

「いいえ！絶対笑ってた！」

ラブコメってる二人。そんな二人を見て、ますます不機嫌になるナギ。

「ハヤテ！向こうに行くぞ！」

「あ、待ってください、お嬢様。それじゃあ、ヒナギクさん、また

…。」

ナギを追いかけるハヤテ。

「あ、ちよつ、ハヤテ君？」

残念がるヒナギク。

『もうちよつと一緒にいてもいいのに…。』

そんな風に思ったヒナギク。そんなヒナギクを見て、

「見てごらん、泉。好きな人ともつと一緒にいたかったと悔いているんだよ。」

「恋する乙女って感じだねえ。」

生徒会三人組、泉、美希、理沙、登場。

「な！なにを…。」

「…心配ない！誰にも言わん！」

ハモった三人。

「だーかーらー！違うって言ってるでしょー！！」

キヤーキヤーッ

四人のオニゴッコがはじまった。



### 第三話：始まりの朝3

- 前回までのあらすじ -

ハヤテとヒナギクがラブラブだったのだ!!

ハヤテとナギはワタルのところへ向かった。

「おはようございます、ワタル君。」

「よ! ハヤテ! ナギ!」

彼は橘ワタル。ナギの許婚ってことになってる。だけどワタルは伊澄が好き。

「...で? その伊澄はどこなんだ? ワタル。」

ナギがワタルに問いだした。

「いや、今日はまだみてねえよ。」

その時ハヤテ、ナギ、ワタルは思った。

『『『まさか: また迷子?』』』』

そう、伊澄はスーパー方向音痴。本編に無事出て来るかもわからないのだ!

「ま、まあ、もしかしたら来るかもしれせんし...」

ハヤテがそう言っても、

「それはない。」

ナギとワタルははつきり言った。しかしハヤテもフォローのしようがなかった。

「で、でも、お嬢様や伊澄さんは、自宅に遊園地があるので、別に今日来なくても...」

「ああ、でも私はあのクソジジイ(ナギの祖父)のせいでまともに遊べんし、伊澄はいつも迷子になってるからなあ...」

狙いすましたかのようなお約束であった。ハヤテも納得するしかなかった。

集合時間になった。ハヤテ達の担任である桂雪路が点呼を始める…。  
『先生が時間内にいる…』

生徒全員がそう思った。無理もない。ダメ人間である雪路が集合時間を守って、教師の仕事をちゃんとしている。

ハヤテ

「桂先生が集合時間を守るなんて…」

ナギ

「地球が滅びるんじゃないか？アル ゲドンとかで…」

ワタル

「デス ロン軍が地球に攻めてくるじゃないか？」

そこに生徒会三人組が加わり、

泉

「桂ちゃん、何かあったのかな？」

美希

「雪でも降るんじゃないか？」

理沙

「いやいや、槍が降ってくるかもしれんぞ？」

…とまあ、みんないろいろ心配しているが、実はヒナギクが雪路を電話で起こしていただけだった。

雪路

「伊澄さんだけ、欠席ね。」

ハヤテ、ナギ、ワタル

『やっぱり…』

読者のみなさん、伊澄が出て来るよう祈っていてください。

雪路

「そんじゃ、移動するよー！」

ハヤテは思った。富士 までどうやって移動するのかと。

ハヤテ

「そつえば、何で移動するんですかね。」

ナギ

「そりゃあ、普通バスに決まってるだろ。」

ハヤテ

「そ、そうですか…ですよねえ…」

ハヤテのこの手のことに関しては外れた事のない直感が告げていた。  
（コミックス2巻参照）ナギお嬢様の言う普通というのは、ハヤテ  
にとっては絶対普通ではないと。

少し移動すると、普通のバスが止まっていた……

……普通？

そんなはずがない。それが世界の決まり事。  
二階だてバス。しかも飛行機のファーストクラス顔負けの豪華さである。

ハヤテ

「ハハハ…なんかこういうの慣れてきたなあ…」

雪路

「よしっ！はいみんな乗った、乗った！！」

雪路の言われるがままにクラス全員バスに乗った。

雪路

「みんな乗ったね。よし！じゃあ出発！」

いつもの雪路だ。

泉

「桂ちゃん絶好調だね。」

美希

「ああ、こうでなければおもしろくない。」

理沙

「向こうに着いてからもおもしろそうだ。」

生徒会三人組はワクワクだった。

一方その頃、三千院家のお屋敷では、

マリア

「はぁ……。なんかつまらないですねえ。屋敷に誰もいないですし……。」

（クラウドスは？）

そんなマリアだけしかいないお屋敷に一人の訪問者が現れた。

咲夜

「ナギー！遊びに来たっただー！！」

咲夜登場。彼女はナギの幼なじみ。

マリア

「咲夜さん、こんにちは。ナギは今日遠足でいないんですよ。」

咲夜

「そうなん？あちゃー。うちの高校今日休みやったから来たんやけどなぁ……。」

咲夜はしょんぼりとした。

マリア

「せっかいですし、お茶でも飲んでいきませんか？」

咲夜

「あ、じゃあ、頼むわあ。邪魔するでえ。」

滅多に見ないシャッフルユニット登場。

### 第三話：始まりの朝3（後書き）

次回、他のシャッフルユニット登場です。

## 第四話：組分け

前回までのあらすじ

やっと出発しました。

富士 に着いた。

ちなみにバスの中で起きたことは、読者の方々のご想像におまかせします。

ハヤテ

「やっと着きましたね、お嬢様。」

ナギ

「ああ、バスの中はうるさくてかなわん。」

ナギは疲労気味な顔で言った。

当然だ。雪路と生徒会三人組が大騒ぎだったからだ。

ヒナギク

「もう、お姉ちゃんたら……」

千桜

「まあ、仕方ないですね。」

愛歌

「そうですね。」

春風千桜と霞愛歌、やっと登場。第四話でやっと…

さて、やっと遊園地に着いたことですし、みんなで遊びまくる！…  
かとおもいきや、

雪路

「はい！じゃあ、組分けするわよー！」

生徒全員

『！？』

生徒達が驚くのを見て雪路は、

雪路

「あれ？言ってなかった？今日は二人一組で行動するから、遊園地に着いたらくじ引きするって…」

ヒナギク

「聞いてないわよ！お姉ちゃん！」

生徒達がざわめき始めた。

雪路

「はいはい、静かに、静かに！言ってなかったは謝るわ……ってなわけにくじ引きはじめー！」

切り替えはや！

というわけで、組分けスタート！



雪路

「じゃあ、綾崎君からね。」

ちなみに名簿順（アイウエオ順）ではなく、作者の都合による順番でくじ引きをやります。

ハヤテ

「はい。」

くじのある箱の中にハヤテは手をいれた。

ゴソッゴソッ

ハヤテ

「あ、ちなみに桂先生。お嬢様の執事としてってことで、お嬢様とペアになるなんてこと…」

雪路

「だめ。」

ハヤテ

「ですよねえ。」

それを聞いたナギが陰で、  
ナギ

『ちっ！』

ゴソッゴソッ…バツ！

くじをひいた。番号がかいてある。

ハヤテ

「1番ですね。」

雪路

「はい、綾崎君は1番ね。」

くじをひき終わると、ハヤテはナギのところへ戻った。

ナギ

「おまえ、誕生日が十一月十一日だからって、そんなに1という数字が好きなのか？」

ハヤテ

「いや僕、狙ってるわけじゃありませんよ。」

雪路

「はい、じゃあ次、瀬川さん。」

泉

「はい！」

ゴソッゴソッ…バツ！

泉

「えっとね、5番！」

雪路

「5番ね。次、花菱さん。」

美希

「はい。」

ゴソツゴソツ…バツ！

花菱

「…5番だ。」

雪路

「花菱さん、5番つと。次朝風さん。」

もうハヤごとの読者のひとはおわかりでしょう。

ゴソツゴソツ…バツ！

理沙

「…5番。」

この結果に、生徒会三人組は雪路にあたった。

泉・美希・理沙

「…「なんで！？二人一組じゃないの？」」「」

雪路

「だってこのほうが楽だし。けど、確かに5番は三つ用意したけど、あんた達が見事に引き当てるとは…」」

つつこんだら負けです。

雪路

「まあ、気をとりなおして、次、春風さん。」千桜  
「はい。」

ゴソッゴソッ…バツ！

千桜

「8番です。」

雪路

「8番ね。次霞さん。」

愛歌

「はい。」

ゴソッゴソッ…バツ！

愛歌

「8番です。」

雪路

「霞さんも8番ね。じゃあ春風さんと霞がペアね。」

愛歌

「よろしくね、ハ・ル・さ・ん！」

パリーンッ

千桜の眼鏡が割れた。マンガではお決まりのリアクションだ。

千桜

「ちょ、ちょ、あやたはや…」

完全にクールとかではなくなっていた。

愛歌

「冗談です。」

顔が完全に悪魔と化していた。

千桜はそれを軽くひいていた。

とまあこんな流れで、くじ引きは続いた。

次回につづく。

場面がかわって、三千院家お屋敷に…

咲夜

「あー、暇やなあー。」

マリア

「ですねえ、ハヤテ君がいないと仕事の進みが悪くて…」

それを聞いて、咲夜がおもしろい事を思いつく。

咲夜

「なあ、マリアさんって17歳やったなあ？」

マリアがいつもより敏感に反応した。

マリア

「え、ええ、そうですね、それが何か？」

咲夜

「いやあ、マリアさんもおええ歳やし、好きな人とかおるんちゃうかなーって思てな……そう、例えば、ハヤテとか…」

マリアは激しく動揺した。

マリア

「な、何言ってるんですか、さ、咲夜さん！ハヤテはそ、そのかわいげのある弟という感じで…」

マリアは顔を真っ赤にしてしどろもどろ言った。

咲夜

『あちゃー。これじゃ好きか嫌いかわからへんわ。』

咲夜はあきれていた。

マリア

「そ、そうですね。私達も遊園地に行ってみましょう。」

話題を変えたマリア。

咲夜

「お、ええなそれ。ほなさっそく、巻田！国枝！」

巻田、国枝、ヘリコプターで登場。

こうして二人も遊園地へ向かった。

#### 第四話：組分け（後書き）

感想待ってます。



## 第五話：それぞれの思惑

前回までのあらすじ

遊園地に着いたハヤテ達。そして、今日行動をともにするパートナーを決めることになった。

クラスの半分がくじを引き終わった。知っている人と一緒になったり、初めて会話をするような人と一緒になったりと、結果は様々だった。

雪路

「えっと、次はヒナね。」

ヒナギク

「はい。」

ヒナギク

『まだハヤテ君のペアは決まってるない・・・』そう、ヒナギクはハヤテのことが好き。できれば一緒にのペアになりたい、ヒナギクそう思った。

ヒナギク

『もし、ハヤテ君と一緒になら・・・』

彼女の想像はどんどん膨らんでいった。考えれば考えるほど彼女の顔は赤くなった。

雪路

「ヒナ、どしたの？」

現実に戻るヒナギク。

ヒナギク

「ほえ！？あ、ごめん、お姉ちゃん・・・」

そして、ヒナギクの顔付きが変わった。

ヒナギク

『なんにしても、ハヤテ君と同じ番号を引かなければ・・・』

ヒナギクの目が燃えていた。

わたしのこの手が真っ赤に燃える！！  
1番を掴めと轟き叫ぶ！！

雪路

「ヒ、ヒナの手が、か、輝いている・・・」

灼熱（しゃくつ）！！ゴッ　ファイガー！！！！

注意・・・

ヒナギクは決してオタクではありません。作者の都合です。

ゴソッゴソッゴソッ！

バツ！

引いたくじを高々と挙げるヒナギク。そして、ヒナギクが引いた番号は・・・

『ハズレ』

ヒナギクは愕然とした。本来、数字がかいてあるはずのくじに『ハズレ』とかいてあったのだから。いや、愕然というより呆れていた。

ヒナギク

「力ぬけるわぁ・・・」

雪路

「お、ヒナが引いたわね。アツハハ！いやあ、ふざけ半分でやってみただけど・・・でも大丈夫よ。ちゃんと引き直しするからって・・・ヒナ？」

ヒナギク

「おーねーえーちゃんー！！？」

ギャーツ（雪路）

他の生徒達はア然としていた。

ちなみに雪路がどうなったかは読者の方々におまかせします。

雪路

「えー、ばー、びをぼびばぼでいで（えー、じゃあ気を取りなおして）・・・」

ヒナギク

「まったく、お姉ちゃんはホントにまったく！」

あらためて、気合いを入れ直し、くじをひくヒナギク。

ゴソッゴソッ・・・バツ！

ヒナギク

『お願い・・・』

ヒナギクが引いた番号は・・・11番！

・・・おいしい！

ヒナギクはがっかりした。この状況、ハヤテが白皇の試験を受けたときの二の舞だ。

ハヤテ

「ヒナギクさん、何かがっかりしてましたね？何かあったんでしょ  
うか？」

ナギ

「さあ、姉の相手で疲れたんじゃないか？」

そして、くじ引きは残りあと二人。その二人とは、ナギ、ワタルだ  
った。

雪路

「あと二人ね。はい、じゃあ、ナギちゃんの番よ。」

ナギ

「はい。」

ナギの顔は自信に満ち溢れていた。

ナギ

『いまだにまだハヤテのペアは決まっていない・・・フツ、やはりハヤテと私、どこに行こうとラブラブに結ばれる運命なのだな!』

ナギはくじの箱のなかに手をいれ、すぐにくじを引き出した。

見るがいい!私とハヤテの絆を!!

・・・11番・・・

ナギ

「・・・つてなに!?!」

雪路

「はい、ナギちゃんは11番ね。ヒナとペアね。」

ナギはこの結果が気にいらなかった。

ナギ

「嘘だ！私とハヤテは結ばれる運命のはず！なんでヒナギクなんかと！」

ヒナギク

「な！なんですって！」

二人は険悪なムードになってきた。

そんな二人を無視して、雪路は進行を進めた。

雪路

「じゃあ、次・・・ん？」

ババババババツ！！！！

急にヘリコプターがおりてきた。

そしてヘリコプターからおりてきたのは・・・

伊澄

「遅れてすいません。」

伊澄登場！奇跡！

ナギ・ワタル

「伊澄！」

ハヤテ

「伊澄さん！」

三人は伊澄のところへ向かった。

ナギ

「伊澄。よくたどり着いたな。」

伊澄

「心配をかけてごめんなさい。」

ハヤテ

「へりで来たのに、どうして遅れたんですか？」

伊澄

「実は、学院に歩いていくうちに迷子になってしまっ……そして結局、執事の方々に拾われて来たの。」

期待通りのパターン……



雪路

「伊澄さん、よく来たわね。けどくじは最後よ。」

伊澄

「くじ?。」

ナギ

「ああ、実は・・・。」

説明省略。

伊澄

「なるほど。じゃあ私はワタル君のあとにくじをひけばいいのね。」

ワタル

「あ、ああ。」

雪路

「はい、じゃあ橘君。くじ引いてちょうだい。」

するとワタルは雪路にこっそり耳打ちした。

ワタル

「先生、あと組っていくつですか?。」

雪路

「安心なさい。まだ出てないくじの中にまだ出てない組の番号もあるわ。」

ワタルは決意した。なんとしても、新しい番号のくじをひくと！

ワタルは息をのみ、箱に手をいれた。

ゴソッゴソッ！バツ！

引いた番号は・・・9番！まだでていない番号だ！

やった！

ワタルは小さくガッツポーズをした。

しかし、ワタルは気付いた。あとくじを引いていないのは伊澄だけ。まだペアが決まっていないのはハヤテとワタルの二組。

一人足りない。

ワタルがそんなことを気にしていると、伊澄がくじを引こうとしていた。

ワタル

「ちよつ、伊澄！」

ゴソッゴソッ…バツ！

伊澄引いた番号は・・・

1番！

雪路

「はい、伊澄さんが1番だから、綾崎君とペアね。」

伊澄がハヤテに近づき、

伊澄

「ハヤテ様。今日一日、よろしくおねがいします。」

ハヤテ

「はい。こちらこそ。」

無事にペアが決まった・・・ってワタルは？

ワタル

「あのー先生？俺は？」

雪路

「あー仕方ないからアタシとペアね。」

ワタルはどうリアクションをとればいいのか迷っていた。

かわいそうに・・・

## 第五話：それぞれの思惑（後書き）

感想待ってます。

## 第六話：デート&ストーキング（前書き）

注意・・・この作品にでる富士 は実際のものとは異なるのでご承知ください。

## 第六話：デート&ストーキング

無事？ ペアが決まったハヤテ達一行。

ここでペアのおさらい

ペア1：ハヤテ・伊澄

・

・

・

ペア5：泉・美希・理沙

・

・

ペア8：愛歌・千桜

ペア9：ワタル・雪路

・

ペア11：ナギ・ヒナギク

などなど・・・

雪路

「それじゃ、それぞれで行動開始してー！」

雪路の指示と同時にクラスみんなが動き出す。

泉

「何に乗ろっかー？」

美希

「やはりジェットコースターだな！」

理沙

「並ぶの面倒くさい！」

こんな感じでみんな動いているが、ナギとヒナギクはまだ入口近くにいた。

ナギが動こうとしないのだ。

ヒナギク

「ちよつと、ナギ！みんな行っちゃったわよ！私達もさっさと行かないと」

ヒナギクは呆れながら言った。彼女からみても、ナギがご機嫌斜めなのはわかった。

ナギ

「ふんだっ！なんでヒナギクなんかと一緒に遊園地で遊ばなければならんのだ！」

ナギはハヤテと一緒にでないことがまだ不満のようだ。まあ、それが好きな人なら尚更だ。

ヒナギク

「な、なんですってー！！私だってナギなんかよりハヤテ君と一緒に



のペアがよかったわよ!」

つい言ってしまった。これではヒナギクはハヤテに好意をいだいて  
いると言っているようなものだ。

ヒナギクはハツと思い、自分の言った事を考えると恥ずかしかった。

ナギ

「なにー!？おまえもハヤテをねらっているのか？ハヤテは私のものだ!」

ヒナギク

「い、いや、そういう意味じゃなくてね・・・」

あたふたするヒナギク。とりあえずごまかそうとするヒナギクだが、  
ナギはまったく聞こうとしなかった。

ナギ

「だいたいハヤテと私は・・・ん？」

急にナギの様子が変わった。それを疑問におもったヒナギクは、

ヒナギク

「どうしたの？ナギ・・・」

ナギとヒナギク。二人が見た衝撃の瞬間・・・

なんとハヤテと伊澄が手を繋いで歩いているではないか！

ナギ・ヒナギク

「「って何ー！？」」

二人は戸惑った。ハヤテと伊澄が仲良く手を繋いで歩いている。言いかえれば、好きな人が他の女の子と手を繋いで歩いている。

ナギ

『ハヤテめー！私と一緒にじゃないからって伊澄に手をだすとは！！』

ヒナギク

『ハヤテ君ったらやっぱり女の子にだらしないわね！そのうえ年下なんて！』

それぞれ心中異なるが、ハヤテに対する怒りは同じだった。

ナギ・ヒナギク

『許さん！！』

二人の周りにダークサードが広がっていた。

何故ハヤテと伊澄が手を繋いでいるかというと・・・

数分前・・・

ハヤテ

「伊澄さん、最初にどこに行きますか？」

伊澄

「遊園地ではあまり遊んだことないので・・・よくわかりません。」

ハヤテはナギが言っていたことを思い出した。

- - - - -

『伊澄はいつも迷子になってるからなあ・・・』

- - - - -

ハヤテは目をうるおんだ。方向音痴の人をここまで哀れんだことはない。

善人である主人公・ハヤテは、

ハヤテ

「伊澄さん。」

ハヤテの改まった態度に伊澄は首を傾げた。

伊澄

「はい？」

ハヤテは伊澄に手をさしのべた。

ハヤテ

「今日一日、僕と手を繋いで行動しましょう。そうすれば迷子になりません。」

伊澄は顔を真っ赤にして、戸惑った。

伊澄

「えっ、あ、あの、そ……」

オロオロしている伊澄の手を無理矢理取り、ハヤテは言った。

ハヤテ

「さあ、行きましょう伊澄さん。今日一日をたのしみましょう。」

伊澄

「え、ちよっ・・・」

こうしてハヤテ・伊澄の二人は歩きだした。

そんな二人の思惑とは裏腹に、ナギとヒナギクは誤解していた。

ナギ

「ハーヤーテー！！いくぞヒナギク！あの二人を追いかけるぞ！」

ヒナギク

「ええ！」

ナギ・ヒナギクも行動を開始した。

そんな女の子二人の誤解にまったく気付かないハヤテ。いや、気付くはずがない。天然かつ鈍感だから。

少し歩くとハヤテ・伊澄の二人はアトラクションの一つを見つけた。メリーゴーランドだ。

ハヤテ

「伊澄さん。まずはあれに乗りましょう。」

伊澄

「・・・」

伊澄は沈黙していた。顔が赤く、顔からゆげがでている。

ハヤテ

「伊澄さん？」

伊澄

「あ、あの、ハヤテ様・・・そ、その・・・やっぱり手を・・・」

ハヤテ

「？　　なんでですか？」

ドンカンッドンカンッ（鈍感鈍感）（学校のチャイム風に）

ハヤテ

「そんなことより、はやく乗りましょう。」

強引に伊澄の手をひくハヤテ。

伊澄

『もう・・・ハヤテ様ったら・・・』

そんなラブラブな二人を遠くから見ているナギ・ヒナギク。

ナギ

『ハヤテのやつー！妙に積極的だな。』

ヒナギク

『ハヤテ君ったら、年下に手をだすなんて・・・やっぱりロリコンなのかしら？』

こんなことを考えながら、ハヤテ・伊澄をストーキングするナギ・ヒナギクだった。

そして、上空からヘリコプターでハヤテやナギ達を見ている人達が・  
・

マリア

「・・・まあ、こんなことになってると思っただけど・・・」

双眼鏡みたいな機械スコープで見ながらマリアはつぶやいた。

咲夜

「まったくやな・・・」

マリア

「ハヤテ君も大胆ですね・・・伊澄さんの手を繋ぐなんて・・・  
さすが天然ジゴロ・・・」

咲夜

「ま、このままやとハヤテはナギの制裁をつけることになるわなあ・



・  
」

マリア

「いつもと同じってことですね。」

咲夜

「それもそやな！」

アハハッ・・・

咲夜

「・・・ってわいら出番これだけかい!!」

マリア

「小説でも私の出番少ないんですか・・・」

## 第六話：デート&ストーキング（後書き）

感想待ってます。

## 第七話：それぞれのグループにて

メリーゴーランドに乗り終わったハヤテと伊澄は、一段落つこうとベンチに座っていた。

もちろんそんな二人をストーキングしているナギとヒナギクは少し離れた場所から監視していた。

ハヤテ

「疲れましたか？伊澄さん。何かお飲みものでも買いに行きましょうか？」

伊澄

「え、私は別に・・・それにハヤテ様が一人で買いに行った方がはやりでしょうに・・・」

ハヤテ

「そうかもしれませんが、伊澄さんを一人にするわけにはいかないで・・・さあ、行きましょう！」

ハヤテは立ち上がり、伊澄の手を引いた。

伊澄

「・・・はい。」

伊澄も開き直ったのか、笑顔で一緒にむかった。

それを遠くから監視するナギとヒナギクはさらにダークサドを広げていた。

ナギ

『まったく！ハヤテは本当にまったく！伊澄とあんなにはしゃぎおつて！』

ヒナギク

『なによもう！ハヤテ君ったら！ずっと手なんか握っちゃって！』

ここでヒナギクは少し冷静になって気付いた。自分が今していること、これはストーキングなのでは・・・自分のしていることが恥ずかしく思ったヒナギクは、

ヒナギク

「ナギ。私達遊園地で遊ぶためにここに来たのよね？」

それを聞いたナギも少し冷静になり、

ナギ

「それがどうした？」

ヒナギク

「だったら私達も楽しみましょ！」

ナギは膨れっ面で言った。ナギ

「ふんだ！そんなことより私のハヤテが伊澄に余計なことをしないように見届けなければ・・・」

ヒナギクも気になっている。好きな人が他の女の子と楽しんでいるのを見て、落ち着いていられるはずがない。

でもハヤテ君は年下の女の子に手を出すなんてことはしないわよね・  
・・（多分）

そうハヤテを信じたヒナギクはナギの手を無理矢理引いてハヤテ達と反対の方向へ向かった。

ナギ

「おい！ヒナギク！何をするのだ！」

ヒナギク

「いいから！さ、楽しむわよ！」

不意なナギを強引に引きずるヒナギクは振り向き、少しさびしそうな顔をし、その場を去っていった。ちなみに他のメンバーは・・・

泉・美希・理沙

泉

「いやあ、楽しかったね、ジェットコースター！」

美希

「ああ、FU

MAを上回る迫力だったな！」

理沙

「よし、次は・・・」

そして三人は次のアトラクションへ。

何もなくてすいません。(オチとか)

千桜・愛歌

この二人はゆっくりお茶しました。

千桜

「愛歌さん。さっきから何を・・・」

愛歌はジャプニカ弱点帳を開いて何かかいていた。

愛歌

「いえ、ただいつでも人の弱みを握れるように整理を・・・」

スラツと笑顔で言った。しかもその笑顔がどこか黒い・・・

愛歌

「千桜さんはバイトのほうはいかがですか？」

千桜

「別に何もありませんが、三千院家の関係者にはれるんじゃないかと心配で・・・」

愛歌

「そうですね。なんにしても、バイトがんばってください。」

愛歌は笑顔（本当の意味で）でいった。



そんな愛歌に対して千桜は、

千桜

『愛歌さんは強いなあ・・・』

（体はよわいけどね。）

二人が会話していると一人の男が近づいてきた。

愛歌はそれに気付き、振り向くと、

愛歌

「あら、君は・・・」

ワタルだった。なぜか一人で行動している。

千桜

「あなたは確か、桂先生と一緒にじゃ？」

当然の質問だが、

ワタル

「先生、知らない間にどつか行っちゃってさ、さがすの面倒だから一人でぶらぶらしてるんだ。」

ちなみに雪路は遊園地でものんだくれてます。

ワタル

「さすがに、一人なのも暇だから、ご一緒させてもらつよ。」

ワタルは愛歌の隣に座った。

愛歌

「ええ、構いませんよ。」

愛歌も千桜も了承した。

愛歌

「ところでワタル君？彼女（伊澄）とはどう？」

ワタル

「な！べべ別に何もねえよ！」

愛歌の質問にあたふたしまくるワタル。

そんな二人を見て、千桜は、

千桜

「かわいそうに．．．．．あれ？」

一度はワタルに同情したが千桜は気付いた。

千桜

『愛歌さん、なんか黒くない．．．というより本当に楽しそう。』

仲良く？会話するワタルと愛歌を見て、そんなことを思った千桜だった。

ハヤテ・伊澄

二人は次のアトラクションに向かって歩いていった。もちろん手を繋いで。

ハヤテ

「伊澄さん。疲れたりしてませんか？」

ハヤテが心配そうに聞くと、

伊澄

「いえ、大丈夫です。」

会話がはずんでいない！

そんな二人に立ち塞がる新たなアトラクションとは？

第七話・それぞれのグループにて（後書き）

ご意見・感想待っています。

## 第八話：おばけ騒動（前書き）

試験勉強で書く暇がなかったので投稿が遅れてすいませんでした。  
小説、お楽しみください。

## 第八話：おばけ騒動

ハヤテと伊澄がたどり着いたアトラクション、それは・・・

『お化け屋敷』

ハヤテ

『えーとっ・・・』

ハヤテ困った。すごく困った。頭をかかえるくらい困った。

今ハヤテの隣にいる伊澄、彼女はゴーストスイーパーのプロフェッショナル。

そんな彼女がお化け屋敷なんていう子供だましに興味をもつだろうか？ いや、もつはさすがない。そうハヤテは思った。

ハヤテはとりあえず別のアトラクションに行こうと伊澄の手を引いた。

ハヤテ

「伊澄さん、あっちにもっとおもしろいアトラクションがあるみたいですよ。」

伊澄の手を引こうとするハヤテだが、

伊澄

「ここ、おもしろそうですね・・・」

伊澄がお化け屋敷を指さして言った。

ハヤテ

『えー！？マジっすか！？』

ハヤテは心の中でつつこんだ。

ハヤテ

「えーと、伊澄さん？お化け屋敷っていうのはですね、別に本物の



おぼけが出るわけではなくてですね・・・」

ハヤテは必死に説得してみるが、

伊澄

「でもおもしろそうです。」

伊澄の目がキラキラ輝いている。

ハヤテも仕方なく伊澄をお化け屋敷に連れて行った。

その近くをナギ・ヒナギク組が通った。

ついさっき別れたばかりだから、っていうツッコミは置いて。

ナギ

「む！ハヤテと伊澄！まだ手を繋いでおるな！」

ナギのダークサイドはさらに広がる。手に持っていたジュース缶を握り潰した。

ナギってけっこう握力あるんだなあ・・・

ヒナギクは最初よりは冷静だが、やっぱり落ち着かなかった。

ヒナギク

『ハヤテ君のバカ・・・』

ナギはいてもたってもいれなくなって

ナギ

「ええーい！やっぱり気になるから後をつけよう！！」

ヒナギク

「あ、ちよつ、ナギ！？」

ヒナギクはナギを止めようとするが猛進するナギは止まらない。  
ずかずかと歩いていくナギ。それを追いかけるヒナギク。その二人  
が見たもの、それは・・・

『お化け屋敷』とかかれた看板。

ここでおさらい！

ナギ・・・暗い所が苦手

ヒナギク・・・高所恐怖症&おばけ関係苦手

(・・・)(汗)

軽くひきつる顔。

ナギ

「・・・あっちのアトラクションおもしろそうだな。」

ヒナギク

「奇遇ね、私も今そう思ったわ。」

お化け屋敷をスルーして遠い目をする二人。

まあ、なんだかんだでお化け屋敷終了。

ハヤテ

「いやいや作者さん！！これだけですか！！？」

隣で伊澄がコクコクとうなづいている。ハヤテ

「いやいやシカトしないでくださいよ！！これじゃあお化け屋敷では何もなかったみたいにしらないでしょ！？」

何もなかったんじゃない？

ハヤテ

「ありましたよ！お化け屋敷に入ると本物のおばけや悪霊がでて、それを僕と伊澄さんで協力して退治したんですよー！！」

あ、わざわざ説明ご苦労。

ハヤテ

「え！？」

いやね、お化け屋敷ってネタでもうパターンバレバレになって思っ  
てさ。ていうか、私はバトル描写を小説にするの苦手だし。

ハヤテ

「めっちゃくちゃじゃないですか・・・」

とまあ、なんだかんだでけっこう時間がたちました。

ハヤテ・伊澄

「・・・」

その頃、生徒会三人組は・・・

泉

「いやーレアな動画がとれたねえ！」

美希

「ああ。SF映画をも凌ぐ超絶バトル動画がとれたな。」

理沙

「まさかこんな動画がとれるとはなー！」

理沙はビデオカメラを持ってニヤリと笑う。

偶然生徒会三人組はお化け屋敷の中にいて、ハヤテと伊澄のおばけ退治するところに遭遇していた。そしてその様子をビデオにおさめていた。

美希

「しかし、鷺ノ宮家のお嬢様にはあんな力があつたとはな・・・」

美希の発言に泉と理沙はコクコクとうなずく。

泉

「さて、すごい動画もとれたことだし、遊びにいくっか！」

理沙

「ああ、そうだな。」

三人組はアトラクションへ向かおうとしたとき、

ドカッ

理沙が誰かにぶつかった。サングラスにマスクをつけ、厚手のコートを着た人だ。（べただなあ・・・）

理沙

「あ、すみません！」

理沙が謝ると、



??

「いえ、こちらこそ・・・」

妙にこもった声だった。

その人は謝ってすぐにどこかへ行ってしまった。

怪しいと思った理沙がフツと気付いた。

理沙

「のああー！！！！私のカメラがー！！」

泉

「どうしたの、理沙ちゃん！！」

美希

「まさかカメラを盗まれたのか！？」

と、心配する二人だが、

理沙

「・・・新しくなってる。」

泉・美希

「？」

そう。確かにカメラは盗まれたのだが、そのかわりにさらに高機能付きのカメラが理沙の手にはあった。

理沙

「・・・なんだったんだ？」

生徒会三人組は首を傾げた。

そしてそこから少し離れたところで、

??

「ふうー。まったくお姉ちゃんは忙しいなあ。」

サングラスとマスクをとり、コートを脱ぎ捨てた。

咲夜

「まあ、伊澄さんのこと（特別な力のこと）、ナギにばれへんようにするのも一苦労やわ・・・」

そう、理沙にぶつかったのは咲夜だった。三人組の撮影を目撃し、動画の隠滅をはかったのだ。

咲夜は伊澄の特別な力のことを知っていて、伊澄はナギには力のことと知られたくないことも知っていた。

咲夜はナギと伊澄のお姉ちゃん的存在。二人ために苦勞してるのだ。

咲夜

「これは貸しにしとくで、伊澄さん。」

そうつぶやくと咲夜はマリアのもとへ戻っていった。

そんなことをまったく知らないハヤテと伊澄は次のアトラクションへむかっていた。もちろん手を繋いで。

ハヤテ

「さっきは大変でしたね。」

伊澄

「いえ、仕方ありませんよ。それに仕事ですし・・・」

まあこんな感じでテンションの低いようなそうでないような会話している二人。

そんな二人がたどり着いたのは・・・

## 第八話：おばけ騒動（後書き）

感想待ってます。

## 第九話：好きな人・大切なもの（前書き）

またまた投稿が遅れてすいません。次回が最後になりそうです。

第九話：好きな人・大切なもの

「ハヤテと伊澄がたどり着いたアトラクション、それは……………」

観覧車。



・・・べただなあ、展開。

ハヤテ

「伊澄さん、もう時間ありませんし、これを最後にしますか。」

ハヤテは伊澄に提案する。

伊澄

「はい、ハヤテ様がそういうなら・・・」

承諾する伊澄。

そして二人は観覧車に乗るため、行列にならんだ。

そしてここでも、

ナギ

「あ、ハヤテと伊澄！」

またかよ！！ストーキングしてないんじゃないのかよ！！

ナギ

「あの観覧車に乗るつもりなのか？よし、私達ものるぞ！」

意気込むナギ。対して、

ヒナギク

「・・・ナ、ナギ。もももつやめるって、いい言ったでしょ。だから観覧車は・・・」

動揺しまくるヒナギク。この子の高所恐怖症は相当なものですね。

ナギ

「うるさい！私はいくぞ！ヒナギクは来なくていいぞ！」

ヒナギク

「そうはいかないわよ！あなたを野放しするとどうなるかわからないわ！私もいく！」

ヒナギクのアビリティー発動！！

生徒会長としてのプライド＆ハヤテのことが気になる＆負けず嫌い

二人も行列に直行！！

こうして、ハヤテと伊澄がまず観覧車に乗り、その次にナギとヒナ

ギクが乗った。

・・・てか、ナギとヒナギクが次ってことはハヤテ達のすぐ後ろに  
いたってことじゃん！！

気付くだろ！！普通！！

はい、作者が自分の文章につっこんだところで、

ハヤテ

「いい眺めですね、伊澄さん。」

笑顔で言うハヤテ。

伊澄

「ええ、そうですね……ハヤテ様。その、さすがに観覧車の中では……その……」

そう。ハヤテはまだ手を繋いでいた。まるで恋人のように……

ハヤテ

「あ、そうでしたね。すいません。」

そういうとハヤテは伊澄の手を離す。

伊澄は離れた手を見ていた。

伊澄

『どのくらいハヤテ様と手を繋いでいたんでしょう?』

そんなことを考えながら伊澄の顔は赤くなっていた。

視点が変わって、ナギとヒナギク。

ナギはハヤテ達の方を気にしているが、その隣でヒナギクはぶるぶると震えている。

カクカクカクカクッ

ヒナギクのビビリようは尋常じゃなかった。

ナギ

「むー！　いったいあつちは何を話しておるのだ！？　ってヒナギク、おまえは何をしている？」

ヒナギク

「べべべべべべ別に！　！　何にも！　！」

声が裏返っていた。

ナギ

「仕方ない。こんなこともあろうかとハヤテの執事服に盗聴器を仕

掛けておいた。」

ヒナギク

「あんななんでもありね・・・」

ヒナギクは呆れ顔で言うが、内心ナイスと思った。

ナギは周波数を合わせようとする。

・・・ガガッ・・・ピー・・・

ハヤテ

「・・・伊澄さ・・・好きな・・・いるん・・・」

ナギ

「む！聞こえてきたぞ！」

ヒナギク

「なんて会話してる？」

ナギ

「うむ、多分好きな人の話ではないか？」

ヒナギク

「え!!!?」

思わず立ち上がるヒナギク。だがその反動で観覧車のゴンドラが揺れる。

再び座って怯えだすヒナギク。

ナギ

「お、伊澄がなんか話したぞ!」

・・・ガガッ・・・ピー

伊澄

「ハヤテ様・・・好きな人・・・いるんですか?」

ナギ・ヒナギク

「!!!!?」

耳を大きくする二人。

ナギ

「い、伊澄のやつ、なんて大胆発言を!!!だがハヤテは私にラブラ



ブなはずだ！！やはり伊澄はまだハヤテのことを！？」

ヒナギク

『は、ははハヤテ君のすす好きな人！！？気になるけど聞きたくないような・・・でも聞きたい！！』

あれこれ悩むナギ。顔を真っ赤にしてその場でもがいているヒナギク。

しばらくして我に返る二人は再び聞き耳をたてる。

周波数を合わせるナギ。

ハヤテ

「好きな人・・・ですか？そうですね・・・今の僕には女の子と付き合う資格はありませんから、好きな人なんて・・・」

それを聞いたナギとヒナギクは、

ナギ

『ハヤテめ、伊澄を傷つけないよううまくごまかしたな。』

ヒナギク

『ハヤテ君らしいわね。』

一波乱起きるかと思われたがなんとかあった。

・・・が！

ハヤテ

「伊澄さんには好きな人いないんですか？」

ナギ・ヒナギク

「は？」

ナギ

『このマヌケ！！伊澄はおまえのことが！！』

ヒナギク

『ハヤテ君、やっぱりロリコンなのかしら・・・』

鈍感君の一言が状況をさらに複雑なものにした。  
ハヤテの質問にたいして伊澄は

伊澄

「・・・いますよ。」

ハヤテ

「どんな人ですか？」

伊澄

「私の大切なもの（ナギ）を命懸けで守ってくれる人です・・・」

伊澄は笑顔で言った。

ハヤテ

「素敵な人ですね。」

ハヤテも笑顔をかえした。

一方、これを聞いたナギは盗聴をやめた。その時のナギはどこか嬉しそうな顔をしていた。

## 第十話：一日の終わりに・・・

観覧車を乗り終えたハヤテと伊澄（加えナギとヒナギク）。もう帰る時間なので集合場所に向かう二人（後ろから二人）。

ハヤテ

「今日一日、楽しめましたか？伊澄さん・・・」

伊澄

「はい、ハヤテ様のおかげで・・・」

伊澄は少し顔を赤くしながらも笑顔で答えた。言い忘れたが二人はまた手を繋いでいます。

ハヤテ

「いえいえ、三千院家執事として当然のことをしたまでです！」

その言葉を聞いた伊澄は急に真剣な表情になった。

伊澄

「ハヤテ様。これからもナギの執事として・・・ナギのヒーローとしてナギを守ってあげてください。」

ハヤテは伊澄の真剣な表情に思わず、

ハヤテ

「あ、はい・・・」

とちゃんと返答できなかった。

伊澄

「そ、それに私は・・・ハヤテ様のヒロインに相応しくありませんから・・・」

つい弾みでボソツと言ってしまった伊澄。自分の言ったことを自覚して顔が赤くなっている。

ハヤテ

「？」

言っている意味がよく理解できないハヤテ。

あからさまに冷める空気。

ハヤテ

『い、いかん！さっきまではいい空気だったのに・・・もしかして

伊澄に嫌われるようなことしたのか！？いやしたかもしれない！！  
いや、したに違いない！！』

心の中で必死にこんなことを考え、悩むハヤテ。  
するとハヤテはこの雰囲気を変える方法を思いついた。その方法と  
は・・・

ハヤテ

「伊澄さん！・・・」

僕のヒロインになってくれませんか？・・・」

しばし沈黙・・・

伊澄

「!!!!!!?????.....」

伊澄はこれまでにないくらい顔が赤くなり、顔から蒸気が出ている。遠回しに告白しているようなセリフだが、ハヤテはまったくそんなつもりはまったくくない。

むしろ、ハヤテは誤解をして、

ハヤテ

『いかん!!何か間違えたか?よし、言い方を変えて.....』

(鈍感というよりバカではないのか?)

ハヤテ

「伊澄さん!.....」



僕、貴女だけのヒーローになってもよろしいですか？」

伊澄

「オロオロ・・・プシュー・・・バタッ」

顔を赤くしてオロオロするも、恥ずかしさのあまり顔から蒸気を出しととう気絶！という動作を声にだして言う伊澄。  
ドラマCDみたいなオチ。

ハヤテ

「ちよつ、伊澄さん！？どうしました!？」

気絶している伊澄をお姫様抱っこするハヤテ。  
ハヤテはとりあえず近くのベンチに向かった。

しばらくして、伊澄は目を覚ます。目を開けるとすぐそこにハヤテの顔があった。

伊澄

「ハヤテ・・・様？」

ハヤテ

「よかった！伊澄さん、急に倒れるんで、どうしたのかと。」

（この鈍感君が原因だけだね。）

心配だったハヤテは笑顔になった。

対して伊澄は恥ずかしがっている。なぜならハヤテがひざ枕をしているから。伊澄がひざ枕をされている姿を想像できませんが。

伊澄

「ハヤテ様・・・もう大丈夫です・・・」

少し残念に思っても起き上がる伊澄。

伊澄

「あの・・・ハヤテ様。さっきの・・・あれは・・・その・・・」

ハヤテ

「？ ああ、さっきのですか？本気ですよ。」

あらためて驚く伊澄。

そしてハヤテは伊澄の手を強く握った。

ハヤテ

「僕は伊澄さんのこと、命にかえてもお守りますよ。」

伊澄

「・・・ハヤテ様・・・」

伊澄の顔は赤いが、嬉しそうな表情だった。  
しかし、

ハヤテ

『伊澄さんはお嬢様の親友。伊澄さんに何かあればお嬢様は心配するに違いない！なんとしてもお守りしなくては！』

とまあ、ハヤテは相変わらずです。

End

とはいかなくて、

ナギ・ヒナギク

「ハヤテ（君）――！！！！！！」

この世のものとは思えない怒りに満ち溢れた怒鳴り声が響きわたった。

ハヤテ

「お、お嬢様！？ヒナギクさん！？」

ハヤテは何が何だかわからないがナギとヒナギクの周りにはダークサイドが広がっていた。二人はこれまでの一部始終を見ていた。どこをどう聞いても告白にしか聞こえないハヤテのセリフに嫉妬心が爆発したのだった。

ナギ

「ハヤテ！！！！伊澄に手を出すとは……この浮気者が！！！！」

ヒナギク

「ハヤテ君！！！！あなたって人はー！！変態！！！！ロリコン！！！！」

ドッカーン！！！！！！

ナギとヒナギクの怒りが爆発した音

ハヤテ

「ちよっ、二人とゴフッ！」

ナギのアッパ―が炸裂！

舞い上がったハヤテを中心に等間隔で構える二人。

ナギ

「いくぞ、ヒナギク！！！」

ヒナギク

「いつでもOKよ！！！」

二人は同時に駆け出し、ラリアットをする。  
そして、

ナギ

「クロ・ンバー!!!」

ハヤテの首は二人の強烈なラリアットで挟まれた。  
ハヤテは窒息死寸前！

というわけで借金執事ことハヤテはいつも通り不幸に終わった。

ちなみにそれを遠くで見守る人は、

伊澄

「ハヤテ様が・・・オロオロ・・・」

ハヤテを心配する伊澄。その後ろから

咲夜

「あーあ、やっぱりこういうオチかいな・・・」

マリア

「まあ、それがハヤテ君のクオリティですからね。」

咲夜、マリア登場。

伊澄

「あら、咲夜。マリアさんも。どうしてここに？」

咲夜

「あんたらが心配で来てやったんや！それより伊澄さん。さっきハヤテ何ゆうたんや？」

マリア

「そうそう私も気になってて……」

伊澄に質問する二人。

伊澄

「それは……今は言えません。」

咲夜・マリア

「？」

伊澄

『ハヤテ様。やっぱり私はあなたのことが

大好きです・・・。』

一日の終わりを告げる夕焼けを見ながら、少女一人は心の中でそう  
言いました。



E  
n  
d

第十話：一日の終わりに・・・（後書き）

ようやく完結です。読んでくださった方々、本当にありがとうございました！次のはいまところ決まっていますので、何とも言えません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4444d/>

---

ハヤテのごとく！アナザーストーリー『レクリエーション』

2010年10月9日03時27分発行